

茶釜縁起考：『九品山縁起』と 越後村上浄念寺蔵『珂碩上人伝記』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯野, 朋美 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6180

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



茶釜縁起考

——『九品山縁起』と越後村上浄念寺藏『珂碩上人伝記』——

飯 野 朋 美

はじめに

稿者は先に、家藏本『名号威徳物語』（元禄八年（一六九五）序刊）と『九品山縁起』（文化九年（一八一二）跋刊）の両方に採録されている説話を比較し、世田谷区奥沢の浄真寺を延宝六年（一六七八）に開いた珂碩（元禄七年（一六九四）没）の奇瑞譚が、どのように変遷していったのかを検討した¹⁾。改めて浄真寺について概説する。浄真寺は、東京都世田谷区奥沢にあり、「九品仏」と通称される。正式には九品山唯在念仏院浄真寺という、浄土宗の寺院である。上品・中品・下品の三仏堂に九体の丈六阿弥陀像（九品仏像）を安置し、三年に一度のお面かぶりを催行することで知られている。また、開山の珂碩信仰によって発展した寺院であり、現在も毎月開山忌法要が行われている。

『九品山縁起』は浄真寺九世の了海が著述したもので、珂碩の奇瑞や寺宝の由来を語る略縁起である。本文冒頭の「九品仏地内案内」では伽藍の配置や安置されている尊像が列挙され、宝物の一部が抜粋紹介されている。以下、八つの条では尊像の縁起や珂碩の奇瑞が語られ、最後に宝物目録を付す。今回は、『九品山縁起』の宝物目録にも登場する茶釜の由

来を述べる、同書の「接待大茶釜由来」をとりあげる。前稿同様、『九品山縁起』は国会図書館蔵本を用いることとする。ところで、新潟県村上市の浄念寺には『珂碩上人伝記』という写本がある^③。この『珂碩上人伝記』にも「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」と題して、浄真寺の茶釜の由来譚が採録されている。浄念寺は快樂山浄念寺といい、もともとは泰叟寺といった。歴代の村上藩主（本多家、榊原家、間部家）の菩提寺であり、珂碩は榊原家の招きにより寛文八年（一六六八）に泰叟寺に入り、約十年間住持をつとめた。また、元禄二年七月一日には、芭蕉と曾良が参詣しており、『曾良旅日記』にその旨の記述が見える。

『珂碩上人伝記』は三巻から成り、上巻が越後に移る前の時代の九話、中巻が越後村上時代の三十五話、下巻が越後から再び江戸に戻ってからの時代の話などの七話となっている。すなわちほぼ時系列に沿って珂碩の奇瑞譚が記されている。作者及び書写年代は不明だが、中巻の最後に「越後御利益御移住の内の記録有事に候へば委細記すに及はず、御家中聞及びし計書載畢」とあるので、越後村上藩に関わりのある者の作と推定できそうである。『珂碩上人伝記』の概要については別稿^④を用意することにした。

本稿では、『九品山縁起』と『珂碩上人伝記』にそれぞれ収録されている、前述の茶釜の由来譚を比較する。両者の成立の先後や、後者本文の特徴について検討したい。また浄土宗の唱導と寺宝の関わりや浄土宗寺院間の説話流動の様についても、若干の考察を行うことにする。

一 「接待大茶釜由来」と「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」の関係

「接待大茶釜由来」は『九品山縁起』中巻第四話である。また、「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」は『珂碩上人伝記』上巻第七話が該当する。「接待大茶釜由来」のあらすじは、前稿で紹介した。大筋は「当山に什物のせつたひ茶釜の

物語り」の内容と一致するので、後者のあらずじを以下に記す。

宇治の里の宮本仁左衛門は一人娘が十六歳になった時に甥の仁右衛門を婿として呼び迎えた。娘は十七歳の時に痲瘡に罹り、不器量になる。それを疎んじた婿（名跡を継ぎ、仁左衛門と改名する）は妾を囲う。さらに、二月十四日の南都二月堂で開催される年玉加持を口実に女房を誘い出し、参詣の帰途、女房を宇治川に沈め、他人には行方不明ということにした。妾（後妻）に男子が産まれるが、仁左衛門は六年もの間寝たきりとなり、死亡した。

息子も仁左衛門の名を継ぐが、七歳の春から父親同様の症状が出て、十三歳までの七年間寝たきりとなる。宇治出身の僧で小石川伝通院で学問中の者が、息子を見舞い、江戸の病人が深川靈巖寺の珂碩上人の十念により回復する様を語る。その話を聞いた母親は親類二人を付き添わせて息子を駕籠で江戸に下らせる。その頃、珂碩上人のもとに宇治川に沈められた女房が現れ、夫の罪状、夫に続き後妻の子にとりついていること、後妻の子は病氣全快のために珂碩上人のもとに参上するだろうが、成仏しないうちは本服しないこと、後妻の子を呵って欲しいこと、付き添いの者に自分は川へ沈められた時の姿であると話してほしいことなどを語った。珂碩はこの女房に戒名を授け、十念と血脈をも授けた。珂碩のもとに息子が参上して十念を望むが、珂碩はすぐには授けず、父の罪を話し、女房の跡を弔うように助言してから十念を授けた。息子は珂碩のもとに日参し、七日目には歩けるようになり、三両で女房の追善供養をした。葛西大嶋村の念仏堂を預かる浄正という者が、息子に茶釜を寄進するように進言した。息子は快諾し、帰宅後は女房の追善を怠らなかつた。

ある日、息子の夢枕に女房が立ち、茶釜を早く寄進するように言う。息子は急いで茶釜を拵えて江戸に下ろうとするが、夜のうちに茶釜がなくなってしまう、茶釜なしでお礼参りに珂碩のもとに参上する。すると、既に茶釜は葛西に届いていた。念仏堂の飛茶釜として参詣の輩は茶釜を戴いた。その後、念仏堂は浪に取られ、本尊と茶釜は砂の中から取り出されたが、再建の沙汰もなく、本尊と茶釜は九品仏に送られた。そのため、両者は九品仏にある。

『九品山縁起』『接待大茶釜由来』と『珂碩上人伝記』『当山に什物のせつたひ茶釜の物語り』を比べると、その分量に

はかなり差がある。前者は千七百五十字強なのに対して、後者は五千五百七十字強ある。そこで両者の内容を比較したい。まずは、違いの概要を表に示す。

表

娘が婿を取った年齢	『九品山縁起』	記述なし	『珂碩上人伝記』
娘が疱瘡に罹った年齢	十六歳	物参り	十六歳
妻を連れ出す口実	記述なし	記述なし	二月十四日の南都二月堂年玉加持
婿が病氣になった時期	記述なし	記述なし	息子が誕生した年の暮れ
婿が死亡した時期	記述なし	記述なし	息子が六歳の年
息子が病氣で歩けない期間	親類	親類	七年
息子が江戸へ下向する際の付添人	簡単な記述	簡単な記述	伯父
亡婦が語る仁左衛門の悪事と自身の迷っている様	なし	なし	詳細な記述
亡婦が水死した際の衣装を珂碩が息子らに語って聞かせる描写	なし	なし	あり
息子が歩けるようになるまでにかかった日数	十四五日	記述なし	七日
亡婦が息子の夢枕に立った日	記述なし	記述なし	帰宅から三ヶ月後
夢枕に立った亡婦の言葉	釜も拵ず御礼に下らす御罰蒙へし	広大御利益を蒙り御やくそくの茶	一日怠れは一日の功德失ふ也
茶釜の大きさ	記述なし	記述なし	水壺斗五升入

『九品山縁起』には、亡婦が婿を取った年齢、婿が病氣になった時期と病氣の期間、息子が病氣で歩けない期間といっ

た時期や時間に関する描写がない。『珂碩上人伝記』では「我子六才の時」とか「十三才の頃迄七年」というように、具体的である。また、婿が亡婦を宇治川に沈めるために外出する際の口実も、『九品山縁起』では「彼女房をたばかり物参りに同道せんとて」とのみ記すが、『珂碩上人伝記』では「毎年二月十四日は南都二月堂に於て年玉加持とて諸人群衆する事也（中略）いさや年玉加持へ連立参らん」と、より詳細な場所・行事の記述がある。

珂碩のもとにやってきた亡婦は『九品山縁起』では、「我まよひしやうす、ちく一申あげ」とあり、息子が参上したら叩いてほしいと頼むが、何をどのように珂碩に語ったのかまでは描かれない。『珂碩上人伝記』では「今は後妻の子に取り付き年をへし事なれば、今はさのみにおもはされ共、今の仁左衛門の病気も私の恨みのなすわさ成、同人病気全快のため明日上人の御元へ参り候得共、私成仏無き内は本服仕間しく候、明日参り候は、此趣きをもつて御申御しかり下されかし、付き添へ参り候輩は能く此事そんし候間、其上にも御疑御座候は、私川へ沈められし時のすかたなれば、此義を仰られ下され」と、後妻の子に取り付いていること、後妻の子が珂碩のもとにやってくるが、自分が成仏しないうちは本服しないこと、叱ってほしいこと、付き添いの親類に自分が宇治川に沈められた時の姿であることを話してほしいと語ったと記す。

茶釜の寄進が遅滞している時、亡婦は息子の夢枕に立ち、諭すのだが、『九品山縁起』では「廣大御利益を蒙り、御やくそくの茶釜も拵ず、御礼に下らず、御罰蒙へし」と、少々脅しの色合いがある。『珂碩上人伝記』では「一日忘れは一日の功德失ふ也」と、教訓めいた物言いになっている。息子が後日寄進した茶釜については、『珂碩上人伝記』では「水壺斗五升入」と具体的な大きさを示すが、『九品山縁起』ではどんな茶釜であるかの言及はない。

このように、基本的な話の流れは同様であるが、『九品山縁起』に比べて『珂碩上人伝記』は記述がより詳しい。『九品山縁起』をもとにして、加筆した結果であろう。この推定に基づけば、『珂碩上人伝記』の書写年代は『九品山縁起』が出版された文化九年以降ということになる。

二 「飛せうこう」記事の意味

『珂碩上人伝記』の「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」では、浄真寺の寺宝「飛茶釜」の由来を述べたあとに、付けたりの高野山の「飛せうこう」という宝物の由来を載せている。苧萱が打ち鳴らす鐘を悪僧たちが奪って捨てようとしたところ、「せうこう」が自然と飛び上がって松の木に掛かり光明を放ったので、悪僧たちは恐れて立ち帰る、という内容である。以下、該当箇所を本文を示す。

往昔苧萱の法師は高野山にまし／＼て鐘打鳴らし念仏を唱ひ玉へは、山内の悪僧ばら此真念の道場にて鐘打事観念の障成、寄集て彼か打鐘を奪ひとり打破つて捨へしと、五六人苧萱の庵室へ参りし処に、せうこうは自然と飛上りて松の高木の上に掛り光明をはなしければ、悪僧はら恐て、今度天狗の為に取われんかとふるひ／＼立帰りし、其後は鐘を鳴らしても構へなく、心静に念仏申けり、今に至りて清峯院に苧萱か飛せうこうと言ふて、高野山の宝物となりぬ、是は天狗の所為なりと云ふ、葛西大嶋村の茶釜は、蒙光清雲信女、仁左衛門、上人への御礼延引せり、一日の懈怠は一日の功德失ふと戒しめ玉ひし事、思ひは清雲の通力なり、末代たりと云へ共、かゝる不思議も有ものは

この記事は、『九品山縁起』には登場しない。この記事と関連があると思われるのは、寛延二年（一七四九）刊行の『苧萱道心行状記』⁽⁵⁾巻第五の「苧萱父子慕三大師徳附飛鉦鼓」である。『苧萱上人行状記』は、説法台本の役割を担つて上梓された長編仏教説話とされ、編者の西向庵春張子は浄土系唱導僧とみられる。少し長くなるが、該当箇所を引用する。

永世氣ヲ謝シテ。幽邃ニ入。從來忘ラズ。榮辱ノ事。半夜灯前三十春。父子等ク礼拝誦経シ。行道念仏シテ。思ヲ西方ニ運。コレ併黒谷上人ノ教導ニヨレリ。上人ハ正ク大勢至菩薩ニテマシマセバ。海山幾重ニヘダツトモ。何ゾ思忘レ奉ルベキヤト。与次カ堅固ニテアリシ程ハ。消息ヲ頼ミ。上人ニ捧テ。念仏ノ安心ヲ問奉シガ。与次モイ

ツシカ古人トナリ。明源法師ハ鎮西ニ趣キ。其外庵ニ至ル者ナケレバ。近キ頃ハ上人ヨリ玉ハリタル。鉦鼓ヲ御形見ト思テ。朝暮ノ勤行ニ。打鳴テ念仏セラル。サレバ中心経ニ。師ノ恩ヲ知ル者ハ。師ヲ見ル則ハ。承事恭敬シ。師ヲ見ザルトキハ。誨ヲ受ン事ヲ思惟ス。孝子ノ親ヲ思ヒ。飢人ノ食ヲ念フガ如クストアルモ。今此道心父子ノ身上ニ。思合セラレテ。イト殊勝ナル志ナリケル。然ルニ此事ヲ。当山ノ僧徒ノ中ニ。浅学偏執ノ人。大行坊頼雲。伝達坊願海。最深坊榮林ナド云者トモ。密ニ議シテ曰ク。吾山ニ於テ鉦鼓ヲ打ナラシ。念仏修行ヲ勤トスル者。高祖大師御在世ヨリ以來イマダ其例アル事ヲ聞ズ。イデ彼法師カ庵ヲ破却シ。鉦鼓ヲモ打ヒシギテ捨ヨトテ。一同ニドツト押入。父子ヲシタ、カニ打テ。本尊持経ヲナケテラシ。此鉦鼓カマヒスシク。觀念ノ障トナレリト。ハルカニ谷底ニナケ入。思ノ儘ニ狼藉シテ。打連カヘル路ノ辺ニ。大ナル杉一本アリシガ。梢ニ光明暉ワタリ。マバユキ程ニ照シタルハ。ナケ捨ツル件ノ鉦ニテゾアリケル。悪僧トモ大ニ恐れワナナギ。サレバコソ吾ハ同心セマシカリシヲ。頼雲カ無体ノ催促ニ。是非ナク組シツルガ。当山ノ天狗ニ今ヤ抓取レンズト。慄ヒフルヒ逃歸テ。其後ハ苺萱父子ニ指人モナカリケリ。件ノ鉦鼓今モ高野山ニ現存セリ。世人飛鉦鼓ト号ス。サレバ頼雲ガ徒。浅智薄才ニシテ。偏執ノ意ヲタクマシフシテ念仏ノ行ヲ謗ル。コレ併大師法弘ノ御意ニ背ケリ、既ニ高祖大師モ、此山ニ余宗ヲ建立スベカラズ。但念仏ハ制外也トノ玉ヒケル。サレバコソ未代マテ。真言一宗ノ外更ニ余宗ナシト雖モ。独念仏ノ一行ノミ。山内ニ繁昌セリ（以下略）

『珂碩上人伝記』では、悪僧が襲撃する前に鉦鼓が飛び上がり、それに恐れをなした悪僧は退散し、その鉦鼓は清峯院に現存する、という話だが、『苺萱道心行状記』では、実際に悪僧は鉦鼓を投げ捨て、その帰途に光り輝く鉦鼓を杉の木梢に発見し、恐れわなないている。『珂碩上人伝記』と『苺萱道心行状記』では高木の種類が「松」と「杉」で異なっているが、「杉」の異体字の「杣」は「松」と混同されやすいことによる結果かもしれない。また、飛鉦鼓のある寺院の名称が記されているか、いないかなど、多少の差異があるが、不思議な出来事が実際に起こったという証拠として高野山

の寺宝の存在を語るといふ性格は、両者共通のものといえるのではないだろうか。

ちなみに、飛茶釜は現在も浄真寺に寺宝として伝えられており、堤邦彦氏著『江戸の高僧伝』（三弥井書店、二〇〇八年）に写真が載る。堤氏は、特定の寺院において寺宝にまつわる高僧の幽霊済度譚が語られる点を、「寺と檀徒の深い紐帯を読み取ることができる」と指摘されている。

飛鉦鼓は和歌山県橋本市学文路の西光寺内の菫萱堂にあり、和歌山県の有形民俗文化財に指定されている。学文路は女人堂に詣でる人で賑わった場所である。多くの参詣客がまぎれもない靈験の証を目の当たりにし、信仰を深めたことは想像に難くない。一方で、高野山の菫萱堂には物語の場面を表した額絵や地藏尊が残されているものの、靈験に関わるような伝承物はないようである。三野恵氏は、学文路菫萱堂で飛鉦鼓を寺宝として伝えていることを、『菫萱道心行状記』の持つ影響力の強さであると指摘されている。

『珂碩上人伝記』の作者は、飛茶釜の正当性を強調するための類例として飛鉦鼓を用いたのであろう。説話の正当性にこだわる姿勢は、浄土宗の唱導との関わりを感じさせる。

ところで稿者は別稿¹⁰で、『珂碩上人伝記』の作者について、越後村上藩の領内に住む者で、浄念寺と関係があり、浄土宗の唱導に関わっていた者と推定した。それは中巻の末尾に「越後御利益御移住の内の記録有事に候へば委細記すに及ばず、御家中聞及ひし計書載畢」と記されているためであった。しかしながら本稿でとりあげた話には、「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」という題が付されている。「当山」とある以上、この話はもともと浄真寺周辺で作られたのではなからうか。

三 浄真寺蔵『茶釜縁起』

実は浄真寺にも、茶釜の由来について記された写本が伝わっている。『茶釜縁起』と題する一本である。残念ながら完本ではなく、話が途中で終わっているうえ、書写年代も特定できない。しかし、寺宝の由来を一冊の冊子にしようと試みたものかと思われる。珂碩の像や九体の阿弥陀仏像と同様に、寺宝の茶釜を庶民教化の重要な道具と考えた人物がいたのであろう。

以下に『茶釜縁起』の略解題を示す。

半紙本一冊。

表紙 薄香色卍繋ぎ文様空押表紙、二十二・九×十五・九糎。

題簽 左肩双辺刷粹題簽に「茶釜縁起」と墨筆書き。

料紙 四周双辺刷粹（十八・〇五×十三・一五糎）有罫楮紙。

内題 「当山什物せつたい茶釜の事」。

本文 每半葉十一行、行二十字内外、漢字平仮名交り、濁点あり。

墨付丁数 六丁、但し第六丁裏は白紙。

遊紙 後に一丁、但し表一行目に「トウスルナリ」と墨書あり。

内容は、『九品山縁起』よりも『珂碩上人伝記』に近いが、息子が十念を望み、珂碩のもとに参上する箇所まで終わっ

ている。以下、両書を比較してみる。

『珂碩上人伝記』の章題は「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」、『茶釜縁起』の内題は「当山什物せつたひ茶釜の事」で、ほぼ同じである。文章表現を一、二、比べてみよう。^①

山城の国宇治の里に宮本仁左衛門と申茶師有、公儀の御用を達し富貴にして暮しけれ共（『珂碩上人伝記』）
 山城の国宇治の里に宮本仁左衛門と申茶師あり、公儀の御用を達し富貴にして暮し（『茶釜縁起』）

然る所に宇治出生の僧学問の為に江戸小石川伝通院より中上りと云て宇治へ登りし時、仁左衛門兼て入魂の人なれば見舞し時に（『珂碩上人伝記』）

然る処に宇治出生の僧に小石川伝通院にて学文いたし中上りとて一先帰られけり、仁左衛門と兼て入魂故見舞に参り（『茶釜縁起』）

このように、両者の本文は、同文に近いといつてよい。『珂碩上人伝記』の「当山に什物のせつたひ茶釜の物語り」は、浄真寺周辺で作られた説話がとり込まれたものである。しかし、そのもとの説話を載せる書物は、失われてしまったのかと思われる。完本ではないものの、浄真寺に『茶釜縁起』が存在することは、その傍証と言えそうである。浄土宗寺院の説話の保有と流動の様相を考える上で、面白い事例の一つと言つて良いであろう。

おわりに

ここまで述べてきたことを、もう一度簡潔にまとめてみたい。

『九品山縁起』に記された茶釜由来譚と『珂碩上人伝記』に見られるそれとは概ね同じ内容であるが、後者の方がより

詳細な記述になっており、前者をもとに後者が作られたと推定できる。よって、『珂碩上人伝記』の書写年代は『九品山縁起』が出版された文化九年以降である。

『珂碩上人伝記』の茶釜由来譚の最後に付された「飛せうこう」の話は、『荊萱道心行状記』巻五に収められた「飛鉦鼓」の話と共通性が認められる。『珂碩上人伝記』の作者は、「飛茶釜」の正当性を強調するために「飛鉦鼓」の説話を組み込んだのであろう。その執筆姿勢からは、唱導に関わっていた者の意識が感じられる。

また浄真寺にも茶釜由来譚を記した不完全な写本が伝わっているが、内容は『九品山縁起』よりも、『珂碩上人伝記』に近い。茶釜由来譚が、茶釜を有する浄真寺に伝存するのは当然とも言えようが、浄土宗寺院の説話の保有と流動について考える上で、興味深い事例と言えよう。

注

- (1) 拙稿「九品山浄真寺にまつわる説話の変遷―『名号威徳物語』と『九品山縁起』―」（『大妻国文』第四六号、二〇一五年）。
- (2) 登録書名は『九品山略縁起』、請求記号は二二九―一二四。大本三巻一冊。紙の粉色表紙。左肩に「九品仏地内案内記」と墨筆書き。序記「関東本山光明寺／南無阿弥陀仏 教養典海（花押）」。内題なし。尾題「九品山縁起巻上（中）終」、「九品山略縁起巻下終」。刊語末の年記「文化申の季夏」。引用にあたっては、私の句読点（、）を加えた。
- (3) 半紙本三巻三冊。後補薄香色布目表紙、その内側に本文共紙原表紙あり。後補表紙左肩「珂碩上人傳記上（中、下）」。内題「珂碩上人傳記上（中、下）」。尾題「珂碩上人傳記上（中）大尾」。引用にあたっては、私の句読点（、）を加えた。
- (4) 拙稿「浄念寺蔵『珂碩上人伝記』に見える奇瑞譚―中巻を中心に―」（『中京大学』国際教養学部論叢』第八巻第二号、二〇一六年）。
- (5) 東北大学附属図書館狩野文庫蔵、寛延二年江戸辻村五兵衛版、請求記号は四―一一八〇八一五。狩野文庫マイクロ版集成による。同書には句読点（、）があるが、引用にあたっては、さらに私の句読点（、）を加えた。

- (6) 『日本古典文学大事典』(明治書院、一九九八年)の「荇萱上人行状記」の項(堤邦彦氏執筆)。
- (7) 第二編IV「九品仏・珂碩上人―幽霊済度の靈験と開帳・講会」。
- (8) 和歌山県教育委員会ホームページによる。http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500700/shinshitei/h21/kenminzoku-h21.3-17-1.html
- (9) 『荇萱道心と石童丸のゆくえ―古典世界から現代へ―』(新典社、二〇〇九年)第一部第三章「勸化本『荇萱道心行状記』」。
- (10) 注(4)に同。
- (11) 『茶釜縁起』の引用にあたっては、私の句読点(、)を加えた。

〔付記〕 貴重な資料の閲覧ならびに撮影をお許しくださった、浄真寺(住職の清水英碩上人と浄念寺(住職の井口信道上人に心より御礼申し上げます。